

けっこう 凄い人

よって、その榮譽を称え
ここに文庫化いたします。

泉 麻人



新潮文庫

すこ　ひと
けっこう　凄い人

新潮文庫

い - 34 - 6



平成四年五月二十五日　発行

著　者　　泉　いずみ　麻　あき　人　と

発　行　者　　佐　藤　亮　一

発　行　所　　株式　新　潮　社

郵　便　番　号　　一　六　二

東　京　都　新　宿　区　矢　来　町　七　一

電　話　　営　業　部　(〇三)三二六六五一一

編　集　部　(〇三)三二六六五四〇

振　替　　東　京　四　一　八　〇　八　番

価　格　は　カ　バ　ー　に　表　示　し　て　あ　り　ま　す。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛にご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社

© Asato Izumi 1992　Printed in Japan

ISBN4-10-107616-2 C0123

江苏工业学院图书馆

藏书章

秦 霖 著



新 潮 社 版

目

次

まえがき……………九

西小山の童女絵師★霜田恵美子……………一〇

パルスビートの妄想★李泰栄……………一九

海を渡る才女★柴門ふみ……………二六

第三京浜の逃亡者★近田春夫……………三六

潔癖症のレプリカ★羽仁未央……………四六

鎌倉マテリアル・ガール★宮崎緑……………五七

吸血鬼ラサール★石井章雄……………六七

ゼビウス博士の眩き★遠藤雅伸……………七六

吉祥寺ミィハー・ブルース★秋元康……………八五

江戸っ子チナの物語★ティナ・グレース……………	九五
ビブロスの父がいた★高見恭子……………	一〇四
ドナルド・ダックの夢★大西厚樹……………	一一四
お天気兄さんのハニカミ★森田正光……………	一二三
マシケのトマト★三国清三……………	一三三
バイオリンのお稽古★久和ひとみ……………	一四二
颯爽なカミキリ虫★いとうせいこう……………	一五一
弘明寺の花園★伊藤緋紗子……………	一六一
不敵なファミコン香具師★高橋利幸……………	一七〇
ピンポンパンは箱入り娘★酒井ゆきえ……………	一七九

「事件」をスクラップする男★みうらじゅん	一八
競艇と商業美術★蛭子能収	一九
あとがき	二〇

けっ
こ
う
凄^{すこ}
い
人

カット・蛭子能収

ま え が き

この本は1985年1月から86年12月にかけて、「小説新潮」誌において、取材、原稿連載していたものをまとめたものです。

“今月の「けっこう^{すく}凄い」人”というタイトルは、当時、「けっこう^{すく}凄い」「これからもっと凄くなる……」と、僕が感じていたような人たち、という意味合いで付けました。僕も、ちょうど媒体に露出しはじめた時期で、ここに取り上げさせていたいただいた各氏には、時代の同志のような、もう一方でライバルのような、そんな意識をもって向き合っていた——といった印象があります。

1992年4月

泉 麻 人

西山の童女絵師

霜田恵美子★イラストレーター

目黒の駅の西口から出ている東急目蒲線は、三両編成の小さな電車で、山手線から乗り換えると、ひどく狭い印象を受ける。最近ではジュラルミン製の近代的な広い車両も増えたのだが、僕が乗った目蒲線は蓬色をした旧い型式のものであった。

目蒲線に乗るのは生まれて二度目か三度目である。あまり乗りつけない電車で、降りたことのない町に向うというのは、それが東京都の目黒区という近所であっても、遠い郊外に向けて旅をするようなゾクゾクした気分にも駆られる。

霜田恵美子という26歳のイラストレーターの住む西山という町を、僕はまだ見たことがなかった。「きいちのぬりえ」か昭和30年代のメンコや小学雑誌の表紙を彷彿するような懐かしい顔を描く女性が育った環境、というものに僕は興味を抱いた。

「目黒区在住・26歳・女性」と言われれば、なんとなく自由が丘にいたようなムートンの毛皮を羽織って、パパに買ってもらったソアラを乗り回して、ユーミンを聴いているようなタ

イプを思い浮かべてしまふ。つまり、あの霜田恵美子の描く、一言で言えばキツチュな世界——とはかけ離れたところに、僕の「目黒区の女性観」はあるのだ。小林麻美の「雨音はシヨパンの調べ」のレコードジャケットを描いた合田佐和子みたいな絵、ならば「目黒区・26歳・女性・イラストレーター」でも納得がゆく。

そんな妄想を展開させているうちに西小山に着いた。ホームの階段を下りると、真正面に立喰いソバ屋があり、カツオブシの匂いがプーンと鼻についた。駅北口にはパチンコ屋が三軒。その脇から奥に伸びる商店街の中に、霜田恵美子の両親が営むシモダ時計店がある。一瞬、関西の阪神沿線を思わせるような俗っぽい風景である。ムートンの毛皮やユーミンのBGMはフィットしにくい。ユーミンというより、毒蠅三太夫がマイクを持って現われ、魚屋のオカミをからかうような昼下りのラジオ番組的な、風情である。

シモダ時計店の前までゆくと、ご両親がわざわざ店の前まで出て、僕たちを出迎えてくれた。時計店は三十年前からこの場所で営業している。ショーウィンドーの中には、霜田恵美子が描いた「宣伝用のイラスト版」が飾られている。商品の値札の文字はすべて彼女の手にやるものだ。

霜田恵美子のギャラは、父親の勲さんが管理している。彼女は毎朝、小遣いをねだるような形で父から千円なり五千円なり支給される。よって、自分がいくら稼いでいるか……等の

問題は全く把握^{はあく}していない。

「別にそういうのは不満^{ふまん}じゃないです。だって、税金の計算とかは全部やつてもらってるし。面倒くさいことは全部やつてもらっちゃうから……」

目黒区立向原小学校時代、彼女は無口なおとなしい生徒であつた。という描写は、こういった人物ルポにおいてはさほど珍しい例ではなく、大抵のアーチストは幼少時代「無口でおとなしい」ものである。それがあるとき何かを契機に発奮する——というのが常套^{じょうと}パターンである。霜田恵美子もそのような「半生記モノ」の展開を忠実に踏み「無口でおとなしく」「あるとき発奮する」のだが、そのしかたが大袈裟^{おおげさ}なのである。

「もう四年生くらいまでは、ほとんどバカな子で。勉強もできないし、発言もしない。三年生のときに特殊学級に入れられそうになつたくらいですから……」

——図工は良かったでしょう？

「絵描くときなんかでも、ただボーッと窓の外を見てるだけで……眠くなつてきて寝ちゃつたり……」

学芸会でオイモの役をやらされ、舞台の上をただゴロゴロと転がっていたり、どうも彼女は、マジに、バカで無口な松本千秋をやっていたようなのである。

ところが五年生のときに、絵に描いたように「発奮の契機」が訪れる。

「班に分れて、社会科の研究レポートを作る宿題があったんです。私たちの班は、無口でポリーッとしてる私が全部押しつけられるはめになって、頼まれると一生懸命やっちゃう方だから……」

——何を研究したの？

「お金の発達。『お金の発達』っていうテーマのレポートを、和同開珎わどうかいじんから世界各国のコインから銀行のしくみ、まで織り込んで絵を入れたりして、一人でものすごい量のレポートを書いて提出した。そしたら、字が全部同じだっていうんで、私だけ誉められて、一気に英雄」

以降、彼女は秘ひそかに中学の勉強を予習し、区立九中に進むと同時に、うって変わって、優等生コースを歩むことになる。この頃、TVで話題をまいていた「おれは男だ！」に触発され、優等生はスポーツもできなくちゃいかん！ ということで剣の道を志す。中学、高校と剣道部で汗を流し、実力は目黒区認定の初段。得意手は「メン」。

昭和40年代後半、全共闘運動の余波を受けて、アンゲラ演劇が盛んな時期である。寺山修司や三島由紀夫に傾倒し、クラスの文集に社会派チックな難しい漢字ばかり並ぶ詩や論文を发表するが、大学受験時までには勉強もスポーツもこなす普通の優等生少女の線に乗っていた。

「受験勉強の壁」にぶつかつたときに霜田恵美子の人生二度目の転機で、ここではじめて彼女は絵の道へ進むことを決意するのであった。

「変わった絵だね、っていう誉められ方をされてたんですよ、小さい頃から」

たとえば、「お父さんの顔」というテーマで出題されたときに、彼女は、父親の皮膚の底を通っている血管とか骨、さらに想像を募らせ、喉の奥の方で舌を動かす小人、その周りでウロウロするバイ菌、といったものまで描き込んでしまう。

生物の解剖の実験が何より好きだったと言う。カエルやハツカネズミを解剖しようとするとき、目線が合うとカエルがビクッと怯えたような目をする。それを確認してから、「痛いかな？ 痛くないかな？」と心の内で問いかけながらハサミを入れていく状況、に興奮していた。

小学校の頃、愛犬を「野犬捕獲」にさらわれたときの話――。

「保健所まで見に行ったら、檻の中でゴロンと犬がひっくり返ってて、口の脇に肉ダンゴがコロッと転がってんの。その状態がマンガみたいで、肉ダンゴに引っかかったドジな犬、って感じ。それがおかしくてヘラヘラしてたら、弟にすごい勢いでにらまれた」

生き物、というものに対して、平常以上に敏感なのであろう。「動物愛護」みたいな社会

的姿势を抜きにしたところで、動物や人間を愛し過ぎてしまった——そんな感じがする。

霜田恵美子の描く「人の顔」は妙にリアルである。桃色の肌はだに紅色の頬ほお、頬の紅潮の具合が、血の気のようなものをグロテスクなまでに表わしている。体臭が漂う。幼女からは小便くさいニオイが、成金風の婦人からは白粉おしろいが、ニヤけている中年男性の顔からはポマードの香りと若干の口臭がニオってきそうな、そんな血の気と体臭の溢あふれる作風である。

「いまみたいな絵は、女子美（女子美術大学）の卒業制作で初めて描いた。子供とかヤクザとかキャバレーのホステスとか、いろんな人の顔を20点くらい描いて、フोटोजェニックフットジェニクって題をつけて出したら、あまりにも女子美の校風に合わなくて、ボツにされまして……」そのボツになった卒業制作を雑誌「イラストレーション」に持ち込み、掲載されて以来、現在のイラストレーター・霜田恵美子がスタートする。

「映画館やマーケットの看板の絵が好きだったの。ペンキのベトツとした感じが……」

そう言えば、ここ西小山商店街には、いまでも旧びたペンキの看板を掲げた店が割と多い。とくに南口のアーケードを抜けたあたりには「赤金食品店」「洋品 赤帽屋」「ほねつぎ 綱井道場」と、彼女が絵の吹き出しに書くようなアナクロな楷書体かいしよたいの看板が目につく。おそらく、かつてはペンキで描かれたグロテスクな映画看板や、その手の張り紙、チラシがもつと氾濫はんらんしていたのだと思う。